

斎藤茂吉の妻「輝子」について、彼女の孫娘が著した『猛女とよばれた淑女』を読む。

輝子は青山で大きな精神病院を営む斎藤家のお嬢様として生まれ、九歳のとき婿養子の茂吉と婚約し、女子学習院を出た後十八歳で結婚する。精神科医の彼が三十一歳、処女作『赤光』で文学界にデビューした翌年である。

都会的な才色兼備で慣習や権威に囚われない自由奔放な性格は、山形出身の田夫野人の茂吉と対照的であった。銀座ダンスホール事件で世間を騒がせ、悪妻との世評も立つ。しかし本人は常にマイペースで前向き。関東大震災、病院全焼火事、東京大空襲などの危機には毅然として冷静沈着な判断を下し、ゴッドマザー振りを発揮する。茂吉とはあまりそりが合わず長い別居期間もあったが、彼の晩年は傍でよく尽くす。

未亡人となつてからの行動力は驚異的である。六十四歳から海外旅行を始め、生涯に百八ヶ国を巡っている。とくに世界の秘境を好み、七十歳代でアフリカ旅行、八十歳前後から北極、南極大陸、ヒマラヤ、チチカカ湖、ガラパゴスなどに出掛ける。著名人の裕福な夫人として周囲から厚遇されたのだろうが、それにしても今ほど手軽に海外旅行へ行けなかった時代によくぞ飛び回ったものだ。「自分の知らない所へ行ってみたい」という好奇心の強さに敬服する。

自然人類学者の長谷川真理子氏の講演を思い起こす。十萬年前以降わずかな人数のホモサピエンスがアフリカ大陸から出てユーラシア大陸の各地に広がり、さらに南北アメリカ大陸やオーストラリア大陸にまで達した。その拡散を促した最大の要因は気候変動や食糧問題ではなく、人間の脳の発達によつて生まれた好奇心だと語る。人間以外の動物は食糧さえ確保できれば、自分の縄張りから出ることは決してないそうだ。

その説に私は半信半疑だった。しかしこの本で斎藤輝子のことを知り、彼女のような好奇心旺盛な人物が数萬年前のホモサピエンスのなかにもいたのだろうと考え納得がいった。